微分·積分 第5回「微分(1)」

萩野 達也

hagino@sfc.keio.ac.jp

https://vu5.sfc.keio.ac.jp/slide/

今日の内容

- 1. 三角関数, 指数関数, 対数関数の微分
- 2. 合成関数の微分, 対数微分

三角関数の微分(準備)

・三角関数の微分を議論するために必要な準備を行う.

定理5.1

$$1. \lim_{x \to 0} \frac{\sin x}{x} = 1$$

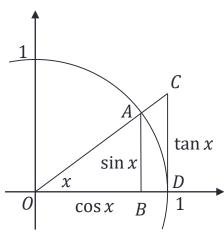
$$2. \lim_{x \to 0} \frac{1 - \cos x}{x} = 0$$

• $0 < x < \frac{\pi}{2}$ において、扇形 AOD と三角形 AOB と三角形 COD の面積を比べると

$$\frac{1}{2}\sin x \cdot \cos x < \frac{x}{2} < \frac{1}{2}\tan x$$

• $\frac{1}{2}\sin x$ で割ると

$$\cos x < \frac{x}{\sin x} < \frac{1}{\cos x}$$



三角関数の微分(準備)

・逆数を取ると

であるから

$$\cos x < \frac{\sin x}{x} < \frac{1}{\cos x}$$

$$\lim_{x \to 0} \cos x \le \lim_{x \to 0} \frac{\sin x}{x} \le \lim_{x \to 0} \frac{1}{\cos x}$$

- $\lim_{x\to 0}\cos x=1$ であり $\lim_{x\to 0}\frac{1}{\cos x}=1$ であるから、挟み撃ちの定理により $\lim_{x\to 0}\frac{\sin x}{x}=1$
- $\sin^2 x + \cos^2 x = 1 \ \text{\downarrow}$

$$\frac{1 - \cos x}{x} = \frac{1 - \cos^2 x}{x(1 + \cos x)} = \frac{\sin^2 x}{x(1 + \cos x)} = \frac{\sin x}{x} \cdot \frac{\sin x}{1 + \cos x}$$

であるから

$$\lim_{x \to 0} \frac{1 - \cos x}{x} = \lim_{x \to 0} \left(\frac{\sin x}{x} \cdot \frac{\sin x}{1 + \cos x} \right) = 1 \cdot \frac{0}{1 + 1} = 0$$

三角関数の微分

定理5.2

- $1. (\sin x)' = \cos x$
- $2. (\cos x)' = -\sin x$
- 3. $(\tan x)' = \frac{1}{\cos^2 x}$

三角関数の加法定理より

$$\sin(x+h) - \sin x = \sin x \cdot \cos h + \cos x \cdot \sin h - \sin x$$
$$= \cos x \cdot \sin h + \sin x \cdot (\cos h - 1)$$

$$(\sin x)' = \lim_{h \to 0} \frac{\sin(x+h) - \sin x}{h}$$
$$= \lim_{h \to 0} \left(\cos x \cdot \frac{\sin h}{h} + \sin x \cdot \frac{\cos h - 1}{h}\right)$$
$$= \cos x \cdot 1 + \sin x \cdot 0 = \cos x$$

三角関数の微分

三角関数の加法定理より

$$\cos(x+h) - \cos x = \cos x \cdot \cos h - \sin x \cdot \sin h - \cos x$$
$$= \cos x (\cos h - 1) - \sin x \cdot \sin h$$

であるから

$$(\cos x)' = \lim_{h \to 0} \frac{\cos(x+h) - \cos x}{h}$$
$$= \lim_{h \to 0} \left(\cos x \cdot \frac{\cos h - 1}{h} - \sin x \cdot \frac{\sin h}{h}\right)$$
$$= \cos x \cdot 0 - \sin x \cdot 1 = -\sin x$$

商の微分の公式より

$$(\tan x)' = \left(\frac{\sin x}{\cos x}\right)' = \frac{(\sin x)' \cos x - \sin x (\cos x)'}{\cos^2 x}$$
$$= \frac{\cos^2 x + \sin^2 x}{\cos^2 x} = \frac{1}{\cos^2 x}$$

三角関数の微分(問題)

問題5.3

- ・ 次の関数の導関数を求めよ.
- 1. $\sin^2 x$
- $2. \sin^3 x$
- 3. $\sin x \cdot \cos x$
- 4. $\frac{\cos x}{x}$

ネイピア数

定義5.4

ネイピア数 e を次の式で定義する.

$$e = \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n} \right)^n$$

- e の値は 2.718281828 ... の無理数であることが知られている.
- ・上の式で e が定義できるためには、 $\lim_{n\to\infty}\left(1+\frac{1}{n}\right)^n$ が収束することを示さなくてはならないが、数列 $a_n=\left(1+\frac{1}{n}\right)^n$ が単調増加で、 $a_n<3$ であることから示すことができる.
- ・ また, $e = \lim_{n \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$ と定義しても同じになる.
- そのため, $e = \lim_{x \to 0} (1+x)^{\frac{1}{x}}$ とも同値である.
- 二項定理を使って展開することで, $e=1+\frac{1}{1!}+\frac{1}{2!}+\frac{1}{3!}+\cdots$ であることが 分かる.

指数関数と対数関数(準備)

・ 指数関数と対数関数の微分を議論するために必要な準備を行う.

定理5.5

1.
$$\lim_{h \to 0} \frac{e^h - 1}{h} = 1$$

$$2. \lim_{h \to 0} \frac{\log(1+h)}{h} = 1$$

まず、(2)を示す。

(対数関数の連続性)

$$\lim_{h \to 0} \frac{\log(1+h)}{h} = \lim_{h \to 0} \log(1+h)^{\frac{1}{h}} \stackrel{\downarrow}{=} \log\left(\lim_{h \to 0} (1+h)^{\frac{1}{h}}\right) = \log e = 1$$

- 次に, (1)を示す. $t = e^h 1$ とおくと, $h \to 0$ のとき $t \to 0$ である.

$$\lim_{h \to 0} \frac{e^h - 1}{h} = \lim_{t \to 0} \frac{t}{\log(1 + t)} = 1$$

指数関数の微分

• 指数関数 e^x は微分しても不変であるという特殊な性質を持つ.

定理5.6

$$(e^x)' = e^x$$

・ 定理5.5(1)より

$$(e^x)' = \lim_{h \to 0} \frac{e^{x+h} - e^x}{h} = \lim_{h \to 0} e^x \frac{e^h - 1}{h} = e^x \cdot 1 = e^x$$

- ・微分して不変な関数は e^x の定数倍しかないことも知られている.
- つまり、微分方程式 f'(x) = f(x) の解は $f(x) = C \cdot e^x$ の形(Cは 定数)となる.
- ・底が e でない場合は講義の後半で扱う。

対数関数の微分

定理5.7

$$(\log x)' = \frac{1}{x}$$

・定理5.5(2)より

合成関数

定義5.8

• 関数 $g: D \to \mathbb{R}$, $x \mapsto g(x) \succeq f: E \to \mathbb{R}$, $y \mapsto f(y)$ で,像 Img g が E に含まれる場合,合成関数

$$f \circ g: D \to \mathbb{R}, \quad x \mapsto f(g(x))$$

を考えることができる.

・これは合成写像の特別な場合であるが、関数であることを強調して f(g(x)) という記号を使うことが多い.

合成関数の微分

定理5.9

• f(y), g(x) が微分可能であれば、合成関数 f(g(x)) も微分可能で

$$(f(g(x)))' = f'(g(x)) \cdot g'(x)$$

• $y = g(x), z = f(y) \ge thx$

$$\frac{dz}{dx} = \frac{dz}{dy}\frac{dy}{dx}$$

と表現することも可能.

・導関数は分数ではないが、形式的に約分できると思うと、右辺から 左辺が得られる。

合成関数の微分の大雑把な証明

- 十分小さな h に関して $k = g(x + h) g(x) \neq 0$ を仮定する.
- g(x) の連続性より, $h \to 0$ で $k \to 0$ に注意すると

$$(f(g(x)))' = \lim_{h \to 0} \frac{f(g(x+h)) - f(g(x))}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{f(g(x+h)) - f(g(x))}{g(x+h) - g(x)} \frac{g(x+h) - g(x)}{h}$$

$$= \lim_{h \to 0} \frac{f(g(x) + k) - f(g(x))}{k} \frac{g(x+h) - g(x)}{h}$$

$$= f'(g(x)) \cdot g'(x)$$

仮定が成立しない場合もあるので、厳密な証明としては不十分。

発展: 合成関数の微分の証明(厳密版)

・一般に, f(x) が a で微分可能なとき, 関数 $\delta(x) = \frac{f(x) - f(a)}{x - a} - f'(a)$ とおくと, $\lim_{x \to a} \delta(x) = 0$ であり,

$$f(x) = f(a) + f'(a)(x - a) + \delta(x)(x - a)$$

• $a \in g(x), x \in g(x+h)$ に置き換えることで

$$f(g(x+h)) = f(g(x)) + f'(g(x))(g(x+h) - g(x))$$
$$+\delta(g(x+h))(g(x+h) - g(x))$$

・これより

$$\frac{f(g(x+h)) - f(g(x))}{h} = f'(g(x)) \frac{g(x+h) - g(x)}{h} + \delta(g(x+h)) \frac{g(x+h) - g(x)}{h}$$

• $h \to 0$ としたとき、右辺の第1項は $f'(g(x)) \cdot g'(x)$ に、第2項は 0 に収束する.

合成関数の微分(例)

例5.10

- $((5x^2+3)^9)'$ を計算することを考える.
- もちろん、展開してから微分しても良いが、計算が面倒である.
- 今, $f(y) = y^9$ と $g(x) = 5x^2 + 3$ とすると, $f(g(x)) = (5x^2 + 3)^9$ となることから

合成関数の微分(例)

例5.11

- $(e^{3x^2+7})'$ を計算することを考える.
- $f(y) = e^y \ge g(x) = 3x^2 + 7 \ge t$ さすると, $f(g(x)) = e^{3x^2 + 7} \ge t$ となることから

$$(e^{3x^2+7})' = (e^y)' \qquad (y = g(x) \ \text{\$\sigma t \})' = e^y \cdot y'$$

$$= e^{3x^2+7} \cdot 6x$$

$$= 6xe^{3x^2+7}$$

合成関数の微分(問題)

問題5.12

- ・次の関数の導関数を求めよ.
- 1. $(x^2 + x + 1)^9$
- 2. $(x^2 + 1)^2(2x^3 1)^4$
- $3. \sin^5 x$
- 4. $\cos x^2$

一般の指数関数の微分

定理5.13

a > 0 に関して

$$(a^x)' = a^x \log a$$

• $a = e^{\log a}$ であるから

$$a^x = \left(e^{\log a}\right)^x = e^{x \log a}$$

と書くことができる.

• $f(y) = e^y$, $g(x) = x \log a$ とすると, $f(g(x)) = e^{x \log a} = a^x$ であるから

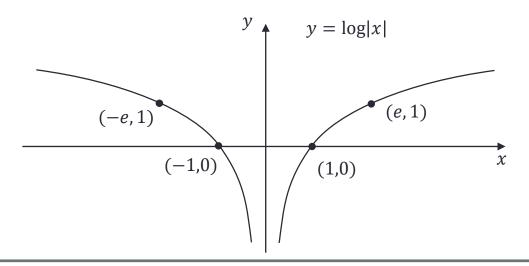
$$(a^{x})' = (e^{y})' \qquad (y = x \log a \ \ge$$
 おいた)
$$= e^{y} \cdot y'$$

$$= e^{x \log a} \cdot \log a$$

$$= a^{x} \log a$$

対数関数の微分の拡張

• $\log x$ の定義域は x > 0 であるが, $\log |x|$ を考えることで, 定義域を $x \neq 0$ なる実数全体に拡張することができる.



定理5.14

$$(\log|x|)' = \frac{1}{x}$$

• x > 0 の場合に成り立つのは定理5.7のままであり, x < 0 の場合

$$(\log|x|)' = (\log(-x))' = \frac{1}{-x} \cdot (-1) = \frac{1}{x}$$

対数微分

定理5.15

・微分可能な関数 g(x) に対して

$$(\log|g(x)|)' = \frac{g'(x)}{g(x)}$$

• $f(y) = \log|y|$ とすると $f(g(x)) = \log|g(x)|$ と書くことができることから

$$(\log|g(x)|)' = \frac{1}{g(x)} \cdot g'(x) = \frac{g'(x)}{g(x)}$$

・関数の対数を取ってから微分する方法は対数微分と呼ばれ、様々な場面に現れる.

対数微分(応用)

定理5.16

• $a \in \mathbb{R}$ に関して, x > 0 において $(x^a)' = a x^{a-1}$

•
$$g(x) = x^a$$
 とすると
$$(\log|g(x)|)' = (\log x^a)' = (a \log x)' = \frac{a}{x}$$

・定理5.15より

$$\frac{a}{x} = \frac{g'(x)}{g(x)} = \frac{(x^a)'}{x^a}$$

であるから, $(x^a)' = a x^{a-1}$.

例えば

$$(\sqrt{x})' = \left(\frac{1}{x^{\frac{1}{2}}}\right)' = \frac{1}{2}x^{-\frac{1}{2}} = \frac{1}{2\sqrt{x}}$$
$$\left(\sqrt[3]{x^2}\right)' = \left(\frac{2}{x^{\frac{3}{3}}}\right)' = \frac{2}{3}x^{-\frac{1}{3}} = \frac{1}{2\sqrt[3]{x}}$$

まとめ

- 1. 三角関数, 指数関数, 対数関数の微分
- 2. 合成関数の微分, 対数微分

発展: ネイピア数の性質(1)

定理5.17

•
$$a_n = \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n < 3$$
 である. $(n$ は自然数)

二項定理を使うと

$$a_{n} = \left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n} = \sum_{k=0}^{n} {}_{n}C_{k} \frac{1}{n^{k}}$$

$$= \sum_{k=0}^{n} \frac{n(n-1)(n-2)\cdots(n-k+1)}{k!} \frac{1}{n^{k}}$$

$$= \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!} \cdot \left(1 - \frac{1}{n}\right) \cdot \left(1 - \frac{2}{n}\right) \cdot \cdots \cdot \left(1 - \frac{k-1}{n}\right)$$

$$\leq \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!} = 1 + 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{3!} + \cdots + \frac{1}{n!}$$

$$\leq 1 + 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^{2}} + \cdots + \frac{1}{2^{n}} + \cdots = 1 + \frac{1}{1 - \frac{1}{2}} = 3$$

発展: ネイピア数の性質(2)

定理5.18

- $a_n = \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$ とすると, $a_n < a_{n+1}$ である. a_n は単調増加数列.
- ・相加相乗平均の不等式は $\frac{x_1+x_2+\cdots+x_n}{n} \ge \sqrt[n]{x_1 \cdot x_2 \cdot \cdots \cdot x_n}$ であり、等号は $x_1 = x_2 = \cdots = x_n$ のときに成り立つ.
- n 個の $\frac{n+1}{n}$ と1個の 1 に対して、相加相乗平均の不等式を使うと

$$\frac{\frac{n+1}{n} \cdot n + 1}{n+1} > \sqrt[n+1]{\left(\frac{n+1}{n}\right)^n}$$

$$1 + \frac{1}{n+1} > \sqrt[n+1]{\left(1 + \frac{1}{n}\right)^n}$$

$$\left(1 + \frac{1}{n+1}\right)^{n+1} > \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$$

$$a_{n+1} > a_n$$

発展: ネイピア数の性質(3)

定理5.19

•
$$e = \lim_{n \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$$

•
$$e = \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n$$
 が定義であったが, $n \to -\infty$ でも同じになる.

$$\lim_{n \to -\infty} \left(1 + \frac{1}{n} \right)^n = \lim_{n \to \infty} \left(1 - \frac{1}{n} \right)^{-n} = \lim_{n \to \infty} \left(\frac{n-1}{n} \right)^{-n} = \lim_{n \to \infty} \left(\frac{n}{n-1} \right)^n$$

$$= \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n-1} \right)^n = \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n-1} \right) \left(1 + \frac{1}{n-1} \right)^{n-1}$$

$$= \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n-1} \right) \cdot \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n-1} \right)^{n-1} = 1 \cdot e = e$$

定理5.20

•
$$e = \lim_{x \to 0} (1+x)^{\frac{1}{x}}$$